

Series

もうひとつの まち 都市の中へ 8

松本コウシ

Visions of a still night

「続・眠らない風景」より

此岸と彼岸の狭間から

十数年前、この街は都市開発によって大きく変貌した。庶民的な匂いのする街並みは重機によって瓦礫と化し、やがて一帯には金網が張り巡らされ、何もない空っぽの街がしばらくの間存在していた。遊郭が隣接するこの街を上町台地断層崖に沿ってしばらく歩いていくと広大なお墓が唐突に現れる。お墓の入り口付近には、角張った道具入れのようにも見える路上生活者の住処が、神聖なる場所の美観を損なうことなく、まるで彼等が管理人であるかのように整然と軒を連ねていた。カメラを担いだ人間の突然の訪問に、管理人達は少し戸惑いながらも、やがて見て見ぬふりをしていています。

お墓に入る。
独特の空気感が一瞬にしてまわりに漂い、それまでの喧騒が幻覚だったかのように静けさが身体を包む。この空気感に慣れないうちは、自分の中で「怖い」という感情が生まれてしまうのだろうか。でもしばらくすると、この非日常的環境がとても心地よく感じ始めてくるのです。

人は死ぬと六つの世界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人道・天道)の何れかに行くと言われていて、その為か、お墓にはたいてい六体のお地藏様がおかれていて、死後何処の世界に辿り着いても、六体あるお地藏様が必ず救いを導いてくださるという。そんな情にあやかりたい人たちが、安堵を求めてお墓に集まって来ているのだろうか。夜なのにあちこちで人の気配を感じます。自転車でやって来て、ぼーっとタバコをふかしながら物思いに考える人、寝袋持参で眠っている人までも。

当て所もなくお墓の中を彷徨っていると、やがて有刺鉄線がまわりつく DEAD END があらわれた。まるで現実世界へ戻ることを拒んでいるかのように。僕はこの此岸と彼岸の狭間にカメラを据えシャッターを切った。冬なのに心地よい風が吹き、僕の記憶の欠片が空(くう)に舞い上がった。

(終わり)



Profile

松本コウシ Koshi Matsumoto

1961年広島生まれ。
大阪芸術大学写真学科卒業後、大阪宣伝研究所を経てフリーランス。
夜の街を彷徨して撮影した写真集「眠らない風景」他、「京阪沿線」
「ウイークエンド」「記憶への旅」「肖像権」などの著作がある。
日本写真家協会・日本写真協会会員。